

大学教育、変わる学生、変わらぬ使命



藤井克己

(国立大学法人岩手大学 学長)

岩手大学は他の多くの国立大学と同様、昨年、新制大学として創立六〇周年を迎えた。同時に法人化第一期六年の終了年でもあった。第二期を迎えた今年には、戦後の大学にとって還暦後の二巡目にあたり、更なる変化の始まりとなるかもしれない。とはいうものの、現実に大学の教員・役員として組織の中に長く身を置いていると、変化を実感しにくいものである。

学生が立て看板ですかあ？

平成一六年の法人化に当たり、岩手大学は正門前に一〇畳ほどの大きさの看板を設置した。そこには「今日から岩手大学は変わります ―岩手の「大地」と「ひと」と共に―」の文字が大書されていた。また全教職員には顔写真入のヒモ付き名札が配布された。外部の人に対して匿名でなく、責任を持って対処できるようにという配慮である。立て看板と合わせ教職員の意識改革と地域社会へのアピールを企図したものであった。

当時農学部(管理職でない)一教員であった私は、正直なところ「やりにくい時代になったなあ」と感じ

たことを思い出す。外から鼓舞されて動くほど単純ではなく、傘張り浪人のような痩せ我慢と矜持だけで辛うじて支えられていたのである。その五年後に学長就任。今度はアピールする側となり、四代目立て看板「共生の時代のパートナー」を掲げ、地方国立大学の役割を訴えた。第二期を迎えるに当たり、五代目は若手職員に標語を募集し「いわての知をみんなの地へ 岩手大学」とした。

これと相前後して若手職員と懇談する機会があった。「昔は学生が立て看板を出したものだが、今じゃ当局がお金をかけて照明つきの看板を出すのだからね」と言ったところ『学生が立て看板ですかあ?』と呆れられてしまった。ペニア板を組んで紙を貼り手書きでアジ文をとという作業と、そもそも学生の出す理由が分からないというのである。

私の世代は、戦後第一次ベビーブームの団塊グループからやや遅れてきたところ。大学紛争の余燼くすぶる騒然とした大学生活だった。キャンパスでは学生の各種団体が、立て看やピラを通じ、てんでに自己主張を繰り返していた。やがて時代は下り、今度は執行部の側に立ち、整然と発信しているといえなくもない。

Walkman のもたらしたもの

振り返れば大学卒業後三五年。ちょうど一世代以上の時間が経過したわけで、若手と意識のギャップが生まれることは致し方ない。「最近の若い者は…」という言い回しは、エジプトの古文書にも見られるというので、世代間の意識の違いは古今東西を問わぬ「普遍的なもの」なのだろう。ただし最近、特に今世紀になって強く感じるのは、年齢の違いと時の歩みが想像力では補えない「不可逆的な変化」に思えることである。例えば自分の父親の考えていたことは、同じ年齢になってみると痛いように良く分かる。それに対し、子どもの（あるいは若者の）考えていることを、わが身の経験から遡って類推することは、極めて難しくなっている。

過去二〇年間の社会変化を決定付けたものはグローバル化とIT化といえよう。しかし個人の行動様式と意識にまで影響した具体的なモノを選ぶとなると、これは難しい。Windows 95の発売から、まだ差し引き一五

年なので、パソコンの影響は甚大とはいえ期間的には短い。その中で昨年七月『Walkman 発売から三〇年』という報道には心動かされた。

私が初めて Walkman に接したのは大学助手になりたての頃。指導する卒論生が自慢げに研究室に持ってきたときである。しかし「これは流行らないな」と思った。ステレオといっても音質の点で今一つ不満が残ったからである。当時は独自のコンポーネントで音を極めながら楽しむのが主流だったし、私も大学院に入りチューナー・アンプ、スピーカーと順に買い足していった。スピーカーをまだ買えずにヘッドホンで最初に聴いた曲が、さくらと一郎の「昭和枯れすき」。流れくる歌声に（今では死語となった）「ハイファイヤー」と鳥肌の立つ思いをしたことを覚えている。それに対し、電池駆動のポケットカセットデッキ、これは私には子どものおもちゃ（それにしては高価）としか映らなかった。

Walkman の特徴の一つはポータブル。つまり持ち運びやすさにある。これも現在は身体に付けた易動性というモバイルに名を変えた。もう一つはパーソナル、つまり個人で愉しむということに尽きる。それまでのようにステレオ音楽空間に身を潜めるといって共有感覚は成り立たない。このように「易動性」の確立と「個」の徹底は、その後のTVゲーム、インターネット、携帯電話の開発に受け継がれ普及を決定付けるものとなった。社会がその商品機能の先駆性と有用性を認めるからこそ新製品は普及するのだが、一旦メジャーになった商品は逆に社会そのものに影響を及ぼし始める。三〇年前、そこを見抜けなかった私は既に「遅れていた」のかもしれない。

〓 大丈夫です 〓 って大丈夫？

非常勤で現場の実験実習をお願いしている外部講師の方から「最近の学生に『質問ありますか?』と問うと『大丈夫です』と返事するんだよ」と苦言を呈された。全て分かつているのかと思えば、決してそうではない。あの返事は何なんだというもの。実は私も先日同じ体験をした。二の句が継げないのである。一昔前は語尾上

